

特集

アルミを連れて

冒険に出よう



道なき道を切り拓き、未到の頂を目指す冒険者たち。
命をかけた挑戦の傍らに、いつもアルミ製品がありました。
九里徳泰さんは、大学在学中にチベット高原のラサ〜カシュガル
3,105kmを世界で初めて自転車で単独走破して以来、
アコンカグア、マッキンリー、チョ・オユー登頂、
アメリカ大陸3万kmの人力縦断など、多彩な活動をしてきた冒険家。
冒険家にとって冒険とは？ 冒険とアルミ製品の関係は？
私たちにもできる冒険はあるのでしょうか？
九里さんのお話から、さまざまな角度で冒険を探ります。

南米・ボリビア アマゾン盆地を
自転車で縦断する九里さん

冒険とは、自分の発想で、 強い動機があって、自分の力でやるもの。

冒険との出会い

冒険に興味を持ったのは、小学校の図書室で探検の本をいろいろと読み、「アムンセンとスコット」の物語に出会ってから。ノルウェーの冒険家アムンセンと、イギリスの軍人スコットが人類初の南極点到達をかけて争った実話です。冒険というのは国を挙げて大金を使ってやるものだと思っていたので、アムンセンが個人で挑戦したと知り、「個人でもできるんだ」と驚いたのを覚えています。

初めての冒険は、小学生のとき、川崎や沼津の親戚を自転車で訪ねたこと。自転車が好きで、1日どこまで行ってこれるかを考え、やりたいことをやれる範囲でやっていき、中学生になると碓氷峠から野辺山駅、富士五湖を越えて湘南に戻るルートを回ったりしました。

冒険を成功に導くものは

初めての場所、知らない土地を走るために必要なのは、事前の座学です。私はチベットへ行こうと決めてから、たくさんの本を読み、過去に中央アジアを駆け抜けた冒険家の足跡と航空地図を付き合わせながら自分の行くべきルートを綿密に定めるという準備に1年くらいかけました。チベット語の勉強も、行く前だけでなく現地に行っても欠かさずやっていました。

何をしたいのか、はっきりとしたイメージを持ち、そのためにすべきことを決め、必要な物やお金を具体的に考えていく。これは小学生のときにアムンセンから教わ

九里徳泰(くのり・のりやす)さん

1965年 神奈川県藤沢市生まれ。日本の冒険家。

1984年 中央大学商学部に入学、サイクリング同好会に入り日本国内の旅を始める。大学3年のとき、チベット高原 ラサ〜カシュガル3,105kmを単独で自転車走破(世界初)。

大学卒業後、人力地球縦断を開始、世界80か国を冒険。

1988年 アコンカグア(6,952m)登頂、5,850mよりマウンテンバイクで滑降。

1989年から7年がかりでアメリカ大陸3万kmを人力地球縦断。

1990年 マッキンリー(6,194m)登頂。

1997年 オペル冒険大賞エポック賞を受賞。

2001年 中央大学研究開発機構助教授に就任、直後にヒマラヤ チョ・オユーに登頂(大学教員としては日本初)。

2003年 シンジャン中央峰(8,008m)登頂。

現在はフィールドを学術研究の分野に移し、知的冒険に取り組む日々を送る。2020年、相模女子大学MBA社会起業研究科教授、2025年より実践女子大学 国際学部 教授。
著作に「チベット高原自転車ひとり旅」(山と溪谷社)、「九里徳泰の冒険人類学」(同朋舎・角川書店)など多数。

たことなんです。

アムンセンとスコットの競争は、アムンセン隊が勝利し無事帰還したのに対し、スコット隊は帰途中で遭難し全滅しま

す。スコットは人類初の到達にすべてを賭け、アムンセンは行って帰ってくるまでを目標としていました。

九里さんにとって冒険とは

冒険には2つの段階があると思っています。1つは、親に守られている世界から飛び出す冒険。次に、誰もやっていないことを発見して、命をかけて成し遂げる冒険。自分の発想で、強い動機があって、自分の力でやる。私の考える冒険はそういうものです。

20代の終わりにアメリカ大陸3万kmを人力縦断したことで「オペル冒険大賞エポック賞」という賞をいただき、以降、「冒険家」を名乗ることにしました。なぜ冒険するのかと聞かれますが、私の場合、やりたいことをやったら冒険だった。それにつきると思います。



北米最高峰・マッキンリー登頂



冒険の世界×アルミ

東京都・三宅島で
風を切って走る九里さん

命を守る、負担を軽減する、役に立つ……。
アルミ製ギアは冒険の世界で大活躍。
九里さん愛用の道具とともに、
冒険家にとってアルミニウムは
どのような存在なのかを考えていきます。

軽さと強さが魅力のアルミ製自転車

九里さんいわく、自転車は「アルミの塊」。フレーム、変速機、ペダル、クランク、ギア、ブレーキ等々、冒険家愛用の自転車は多数のアルミ製パーツでできています。

アルミ製自転車の魅力は、なんといってもその軽さと強さ。ワイルドな道の長距離走破、急斜面の滑降といったアグレッシブな活動の場で、軽くて強いアルミ製の自転車が力を発揮してきました。

それだけではありません。冒険のため遠く離れた地へ自転車を運ぶという最初のミッションをクリアするためにも、アルミ製であることは重要です。日本からチベットや南米まで「飛行機で運ぶことを考えたら、アルミ製しかない」と

九里さん。アルミニウムより軽い素材としてカーボンがありますが、強度の面ではアルミニウムに軍配が上がります。悪路で岩にぶつかることもあるそうですが、アルミ製なら多少のキズができては割れることはありません。



アンデス5,000mの峠

食とアルミ製品のいい関係

アウトドアで使うアルミ製品といえば、まず思い浮かぶのが鍋や食器。食事は命をつなぐためだけでなく、旅の最大の楽しみでもあります。九里さんは、他の素材も試したうえで、「鍋はアルミ以外考えられない」と太鼓判を押します。アルミ鍋は熱がムラなく伝わり、制御しやすく、ご飯もおいしく炊けるのだそうです。

頑丈で、長く使えることも魅力です。九里さんが長年愛用した鍋の焦げや凹みから、ハードな環境下での実力がうかがえました。また、ここでも軽さがポイントに。「とにかく軽いので、山でも、自転車でも、カヌーにも携帯します。そのうち穴があくかなと思っていただけ、なんともない。一生使いそうです」



乾季のウユニ塩湖を渡る

命を守り、体への負担をやわらげるアルミ

「テントポールやトレッキングポールもアルミ一択」と九里さん。「アルミのいいところは、しなって、粘ること。アルミ製のテントポールはパタゴニアの風速50mの中でも折れることはありませんでした」

登山や、起伏のある長い道を歩くとき、転倒を防ぎ身体への負担をやわらげるトレッキングポールは必需品。手に持つ道具なので軽さはもちろんのこと、体重をかけることもあるため、強さとともにしなやかさが求められます。アルミニウムはこうした特性から、百戦錬磨の冒険家にも「積極的に取り入れるべき」と推奨される素材といえます。



カラビナは、まさに命をあずける道具
(写真は九里さん所有のものではありません)



カナダ〜アラスカ沿岸水路1,800kmをシーカヤックで漕破。パドルのシャフトはアルミ合金製であることも多い



マッキンリーを進む九里さん。登山では、携帯する荷物をいかに軽くするかが最重要課題の1つ



アメリカ・ワシントン州
レーニア山にて



九里さんが長年愛用してきたアルミ製ギアの数々。緑色のボトルはフランス製の水筒で、「あくまで主観ですが、水がおいしく感じる」のだとか

週末に
出かけよう!



ちいさな 冒険

命がけの大冒険に憧れるけれど、
さすがに現実的ではなさそうだ。
でも、日常とは違う体験をしてみたい!
そんな私たちにもできる、ちいさな冒険。
ちょっと足を延ばしてみると?
あるいは足下をよく見てみると…?
思いがけない未知の世界との出会いが
待っているかもしれません。



① 半径1メートルの冒険!?

近所の公園に出かけ、足下の草地や、植え込み、木の幹や枝葉を虫眼鏡で覗き込んでみましょう。何が見えるでしょうか? これは「マイクロハイク」と呼ばれる、半径1m以内の「異世界」に出会う冒険です。



身近に広がる自然や生きものへの関心、愛着が高まるマイクロの冒険。
子どもたちと過ごす休日のイベントにいかがですか?



普段は見過ごしている、あるいは見つけることができない“異なもの”が大写しになります。それは可憐な花だったり、葉っぱに生えた無数の毛だったり、重戦車のような姿のだんご虫だったり。身近な場所にも多種多様な生物が生きていることや、知っているようで知らなかった、虫眼鏡だから見える生物の真の姿に改めて驚かされます。

たとえ近所でも、これははれっきとした冒険。草むらに入るときは、長袖・長ズボンで、虫除け対策をお忘れなく。



① あると役立つ、 あったら楽しいアルミ製ギア

大きな力がかかったときも破断しにくいアルミ製ポール。折りたたみ式や伸縮式など、携帯もしやすくになっています



圧倒的な軽さと性能の高さから、九里さんのような冒険家が雪山にも携行するのがアルミ製ギアです。日帰りのちいさな冒険にもぜひ、アルミを連れて行きませんか。



熱がムラなく伝わるアルミ製のクッカーは、料理の失敗が少なく、アウトドア初心者におすすめ。バックパックの旅には、軽くて強度もあるアルミカップが重宝します。



山歩きには、転ばぬ先の杖、トレッキングポールを使うと使わないとでは、疲れ方にはっきり差が出ます。足を怪我したとき、自力で下山する助けになることも。

「もしも」のとき、アルミ製保温シートが役立つことがあります。災害時には簡易防寒具にもなります



② 短くてシンプル、 でも日常とは違う!

九里さんは子供の頃、住んでいる町から見える富士山や丹沢の山々にいつか行ってみたいと思っていたそうです。中学生になり、自転車に乗って日帰りまでどこまで行けるかという冒険に出ました。「自分のテリトリーを出て、いろんなことをやってみようというのも冒険の範疇」と九里さんは言います。



サップは気軽に始められる海や湖のアクティビティ。のんびりと、雄大な自然を楽しみたい人に

例えば、会社からいつもと違うルートで帰ってみる、降りたことのない駅で降りてみる。窓から見える低い山に登ってみる、いつも見ている対岸にカヌーで渡ってみる——。日常の範囲から出て、自分で考えた企画に挑戦し、見たものや体験を楽しめたなら、それはもう素敵な冒険です。



この鮮やかな実は…!? 普段の生活では見ることのない珍しい植物に出会えるのも山歩きの魅力

